

## 裁判所で

リースル・カールシュタット　それではあなたは原告を犬畜生と呼んだと認めるのですね。

カール・ファレンティン　はい。ですが私は、それで彼を侮辱することにはならないと思っただんです。

L K　どうして、そう思っただのですか？

K V　それはですね、あいつが本当にとんなおしゃべりをしたからです。

L K　ご自身もとんな話をしてると思いますよ。なぜなら犬畜生は動物であり、動物はしゃべれませんからな。それとも何か動物が口を利くのを聞いたことがありますか？

K V　もちろん。オウムです。

L K　ですがオウムは犬畜生ではない。

K V　オウムが馬鹿な口を利いたら、オウムもやっぱり犬畜生ですよ。

L K　オウムが馬鹿な口を利くのを聞いたことがあるのですか？

K V　もちろんです。

L K　説明して下さい。

K V　証明できます。妻がオウムを籠に入れて飼っているのですが、その籠をトントンたたくと、あの犬畜生は「お入り！」と言います。

L K　それを馬鹿らしいお考えなのですか？

K V　そりゃそうですよ。

L K　なぜです？

K V　どうやったら私がそんな小さい籠の中に入れるのです？

L K　本題からだいぶそれてしまいましたな。　なぜ、あなたは原告を犬

畜生と呼んだのですか？

K V　妻を侮辱したからです。

L K　どのようにですか？

K V　妻に向かって、まめけアヒルと言っただのです。妻はアヒルではありません。証拠があります。

L K　証拠を提出するには及びません。原告が犬畜生でないのと同様、あな

たの妻はアヒルのはずがない。少なくともまぬけアヒルではない。

KV 裁判官殿、「少なくともまぬけアヒルではない」ということは、女はアヒルではありつるとあなたはお認めになるのですね。そしてアヒルはまぬけです。

LK どうしてアヒルはまぬけなのですか？

KV アヒルは何にもしゃべれないからです。

LK 動物はしゃべれないものだ。

KV でも、オウムがいますよ。

LK また、とんまのオウムを持ち出すんですな！

KV お言葉を返すようですが、オウムはとんまではありません。それに、裁判官殿、あらゆるトンが馬鹿だとは言えんでしょう。サーカスには芸を仕込まれた豚がいますよ。つまり利口なトンが。

LK でも、ここで取り上げているのはまぬけアヒルのことです。芸をする豚ではない。

KV わかりました。妻の件に戻りましょう。

LK それでは侮辱の原因についてだが、どのような理由から原告はあなたのアヒルをまぬけな妻と呼んだのですか？ 失礼、逆を言っつもりだったのだ、あなたの妻をまぬけアヒルと呼んだのですか？

KV これには曲折紆余があります。

LK 紆余曲折でしょう。

KV 紆余曲折です、そうそう。うちでは庭に花壇を作ってるんです。そしてヴィンマーさんの奥さんも花壇を作ってるんです。それが隣同士でしてね。それでいつも、どっちの花がきれいかって競争なんです。

LK ふむ、それで？

KV それから、私たちはいつも種をやりつくらしてるんです。

LK 何をするんですって？

KV 種の交換です。例えば、向こうからキクの種をもらえば、こちらはダイオウの種をお返ししたり。そして今年は、うちの窓辺の花に言ってピアシンスでなくてヒマワリの種をくれたんです。そのヒマワリがあんまり花をたくさんつけたものだから、窓から外が見えなくなっちゃったんです。そしたら、

ヴィンマーの亭主が私の妻を、まぬけアヒルって言ったもんで、私も「あんたは犬畜生だ」って言っちゃったんです。そしたら、奴は私に……

(間)

L K 彼は何て言ったのですか？

K V (黙っている)

L K さあ、言いなさい、彼は何と言ったのかね？

K V あのう、裁判官殿。下品な男がこんな時なんて言うか、ご想像がつくでしょっ？

L K ほら、何と言ったんだね？

K V 傍聴禁止にして下さい。